識見の点に於て如何なるべきか亡せにし大家の傑作を出版する節其肖像を巻頭に掲ぐるとハ事かはり徒に著者の面貌を曝してまで商売の売る所となるハあまりといへば廉恥を蔑せしに者にハ無之しや　（関如来　一葉宛書簡　明治28年12月15日付け）

この写真をめぐって、私がもっとも興味を抱くのは、はたして一葉自身はこの口絵に掲載された自らの写真を見て、どのように感じたのだろうか、ということである。「見られる」存在としての「自分を見る」という行為は、女性作家の自己認識をさぐるうえで、重要な意味を持つ。このことを考えるための直接的な資料は残されていない。

今後の研究の展開としては、この「閨秀小説」号に肖像写真が掲載された中で、もっともスキャンダラスな扱いを受けた女性作家、田沢稲舟について考えてみたいと思っている。一葉とは異なり、稲舟は日記のような形での第一次資料は残していないが、彼女の小説作品のなかに突発的に発揮される暴力性は、世間からの抑圧に対する稲舟の無意識のうちの反抗ではないかと思われる。さらに、田辺花圃・北田薄氷・瀬沼夏葉らについても考察をすすめ、明治二十年代の女性作家をめぐる状況を明らかにしていきたい。

質疑応答

司会：平野　由紀子

＜研究発表＞　「平安貴族の婚姻と女性」　胡潔

問：アン・ウォルソール（カリフォルニア大学アーヴァイン校）

カリフォルニア大学のアン・ウォルソールと申します。ご報告は大変面白いと思いまして、貴族系の男性と女性に関して論じて下さいましたが、日本の天皇と女性の関係について話していただけますでしょうか。

答：胡潔

私は平安文学の専攻で主に平安貴族の結婚を取り扱っていますが、しかし、専門的に皇室婚については取り扱っておりません。ただ、私の考えでは、当時はその皇室婚には、中国の例えば后一人というふうに中国の制度を導入していると思いますが、しかしそれでもやはりその社会基盤特に貴族を含めた一般社会の婚姻体系婚姻制度にはやはり影響されると思いますので、「皇室は例えば一夫多妻多妾制のような構造で、一般社会では一夫多妻」というふうにははっきりとは分けられないと思います。皇室婚においても、貴族社会の結婚と同様な要素が多く含まれていると私は思います。よろしいですか。

問：高野晴代（星美学園短期大学）

星美学園短期大学の高野と申します。大変分かりやすく勉強させていただきました。平安のどういう時期に同居ということによって優位な立場になるようになったか伺いたい。

答：胡

北の方という同居を指す、同居の妻を指す言葉を手がかりに調べたところでは、やはり10世紀半ば頃

からこの言葉が出てきます。勿論この言葉が出るということは、すなわちその時から夫婦同居が始まるというわけではないと思います。ただその夫婦同居が一般化してきたのは、恐らく10世紀頃じゃないかなと私は推測しております。それから、もう１つさっき通いと同居の関係なんですが、これが実は一番微妙なところで、私は便宜上つまり当時は北の方という存在が現れてきたし、それから「むかいばら」という呼称の現れてきたということは、やはり当時は多妻間にはそういう区別・分化はしていると思います。住みというのは持続的に通っているならば、「住み」で「通う」でもある、妻のもとへの定着度の違いで「同居の妻」と「別居の妻」というふうに分けていますけれども、そこら辺のその住みと通いはもともとそれが質的に違うというものとは思いません。ですから優位というものははっきりと一線を区別することはできない、というふうに思っておりますが。答えになったでしょうか。

答：高野

わかりました。非常に難しい部分ではありますが、よくわかりました。ありがとうございました。

問：大池真知子（お茶の水女子大学）

人間文化の助手をしております大池と申します。２つ質問があるんですけれども、一つ目は中国の一夫一妻多妾制という場合に、妻と妾の間に非常に階層があることはわかりました。妾の間でその政治的な、位置をめぐる争いのような妾の間での上下関係というのがあったのかどうかということ。もう一点は、これは私が文学専攻なので知りたいのですけれども、平安期の女流文学と男が書いた文学といろいろあると思うんですが、その中で結婚というテーマが大体どういう感じで書かれているのか、胡さんがこう拾い上げてきたものなのか、非常に中心的なテーマとして現れているのか、それをちょっと伺いたいんです。

答：胡

まず、最初のご質問なんですが、確かに中国古代はですね、古い時代は妾の中にも「ヨウ」という言葉があって、それが「貴妾」いうんですね。ですから妾の中でも地位の高い妾が存在した時期が文献からみるとあります。ただその妻と妾の分け方は、それは「宗」の正式な成員権を持っているかどうかその成員権の有無によって、いろんな意味で経済的とか、家族関係とか全部違ってくるので、「宗」における地位がないという点では共通しているということです。それから二点目は、当時の女流文学を理解するためには、当時の女性は一体どのような婚姻形態のなかで生活しているか、そして、どういうふうに考えているかの問題を抜きにして平安文学を正確に理解することができないと思って、この研究を始めました。

＜研究発表＞　「江戸時代における武家女性の生活」　吉田ゆり子

問：岩下哲典（明海大学）

明海大学の岩下と申します。よろしくお願いいたします。頼山陽に関心があるものですから、脱藩してしまったときに、家の家業の維持や永続それから家名の保全、そして家産の維持にまでわたる危機に落ちいるわけですが、それをどんなふうに彼女が乗り切ったのかということを教えていただければありがたいと思います。

答：吉田ゆり子

春水は基本的に藩に対しては自分で廃嫡するという形で、藩の罪を受けないようにしています。権二

郎というものを養子に取る時も、そういう公式罰を受けない形で、養子を手配していたというふうに覚えております。それは表の世界に対してですけど、家庭の中ではどうしていたかというと、殆ど春水は感情の動きについては記していませんが、梅颸の方は非常にこまごまと心配を記し、それから幽閉してしまうのですけれども、そこに至る心の痛みというものを書いていたというふうに覚えています。

問：岩下

その後、山陽は故郷に対して手紙を送ったりしているようなんですが、母親はその山陽に対してどんな思いを持っていたのでしょうか。

答：吉田

具体的に何かものを送ったかどうかというところは覚えていないのですけれども、久太郎（山陽）の手紙は母親宛だけですよね。すみません。それ以上は今ちょっとよくわかりません。

問：許栄恩（大邱大学）

韓国の大邱大学の許と申します。最後の結論のところで、男性は主人として女性は下人として一種のパートナーとして役割分担をして家の中に補充されるとおっしゃっている家族構造は現在のと違うのか、それとも同じものなのか、違うとしたらどういうところが違うのでしょうか。

答：吉田

日本の場合、家父長制というのは、これは非常に議論があるところで、ただここの場合は、権力関係といいますか、誰がその家族の中での力をもっているかという意味で使っています。ただ、日本の場合はその男性と女性という両方のファクターだけでは考えられずに、その両方ともが永続性を求める家という、ある意味では特殊なそういう制度といいますか、機構といいますか、それに縛られているんではないか。必ずしも男性による女性支配というようなことは言えないと思うんです。春水自身も家というものをとにかく守るというのが一番の至上命題だということがいいたかったんですね。で、今の現代の家族はどうかといいますと、役割分担というものはやはり基本的にあるのではないかと思います。ただ、役割分担がいけないかどうかの問題ではなくて、それが社会でこうあるべきだという規範みたい形になった時に、問題が生じるんだと思うんです。今は武家家族というものを見ることによって当時の役割分担のあり方、そして奥の世界の担い方、両者が縛られている家というものの機構を押さえることによって、当時の社会というものをもっと具体的に、価値判断抜きに分析したいと考えています。

問：林マリヤ（武蔵野女子大学）

武蔵野女子大学の林と申します。主婦が春の仕事秋の仕事というので、家族の着物とか布団なんかを調達していますね。それの経済的な裁量というのは主婦が一々夫にその許可を得てそういうものを作っているのか、或いは全部主婦の裁量で家族の着物や布団や色々なものを調達しているのか、その辺をちょっとお聞かせ願いたい。

答：吉田

基本的に家計は家産の維持という重大なことなので、これはすべて夫である春水が握っています。日用的な綿打ち、着物を作るなどを夫に断ってからやっているかどうかは定かではありませんが、ただ物を買った場合には必ずそれは夫である春水の帳簿に記載されることになっています。

問：アン・ウォルソール

アン・ウォルソールです。質問は２つなんですが、作業、これは必ず家族のためでしたんですか。時々

他の人に売りましたんでしょうか。

答：吉田

着物ですか。

問：ウォルソール

例えば、織ったものとかね。

答：吉田

はい。

問：ウォルソール

というのはね。もっと低い階級の武家だったら作ったものを他の人に売っているんですね。

答：吉田

内職という意味ですね。

問：ウォルソール

それでもう１つは、もっと一般的な説なのかも知れませんけれども、山川菊栄さんの武家生活に関する本がありますね、水戸藩の。両方とも儒者の家だったので似ていると思いますが、それについて比較したことはありますか。

答：吉田

特に比較をしてはおりません。そうですね。和歌山藩のやはり儒者の娘で小梅日記というのが残っていまして、それについては若干比較してみたことはあります。ただ、仕事というものが実は小梅については出てこなくて、むしろみんな買っているんですね。大場美佐という世田谷の代官の妻ですが、それについて比べますとやっぱり出てきますね。女性の仕事ってやはり着物の仕度というのが中心であると思います。私たちの母なんかも既製品を買わないで子供には手で作ってあげていた、それと布団もみんな綿からやっていたというのを思い出すと、何かそういう意識というものが現代の主婦のある時期まで規定していたんじゃないかなという気持ちはしています。内職の件ですが、確かに最初３０人扶持で貧しいですけれども、実家からいろいろなものを補給できるようで、内職するようなことは特にないんですね。販売用にはしていません。

＜研究発表＞　「〈女性作家〉という職業」　菅聡子

問：山口誠（東京大学）

東京大学社会情報研究所の院生の山口と申します。発表非常に面白く聞かせていただきました。というか、非常に勉強になりました。２つ質問したいのですが、当時の読書空間についてです。樋口一葉の本を誰が読んでいたか。例えばここでビジュアリティーの問題で芸者と女性作家のプレゼンスのし方が類似性があるということを、指摘されて、これは非常に説得力がありますが、そのビジュアルティーのオーディエンスはつねに男性であったのか、例えば女性作家というジャンルがある種女性的なオーディエンスを喪失した可能性というのはないのか。例えば、この時代のその新聞の記事にある記述で、うちの娘は女学校には通っているが、新聞なんか読ませないという、父親の記述があるわけで、文字文化に対する女性の位置について、是非ともお聞かせ願いたい。もう１つは博文館のマーケティングその戦略について、樋口一葉またそれ以外の女性による作品または作家性というものをどういった意味付けで

マーケティングしていたかということをお聞かせ願いたいです。

答：菅聡子

ご質問の一点目、一葉作品と読者階級とか読者層についてのですが、『文芸倶楽部』という雑誌は基本的には読者は男性であります。ですから、当然この写真の眼差しには、読者の男性読者の欲望の眼差しというのが当然意識されております。それで、ちょっと説明の中では省略したのですが、資料の１のですね、資料の１枚目の④番をご覧いただけますでしょうか。この閨秀小説という特集号が出されましたとき、非常に話題を呼びましたので、殆どの雑誌や新聞ではこれを取り上げております。この④番は、その中ではご存知の『女学雑誌』という基本的に女性のための雑誌に掲げられたその批評であります。筆者が岩本かどうかはわかりません。それで、ここでは例えば「巻頭７女文士の肖像は初めて盛容に接してますます其才を慕はしむるの感あり」、という形でこれは明らかにむしろ女性の視線というものが重ねられていることがわかります。ですから、ご指摘のように、こういうビジュアルという形でのアピールというのは読者層によって大きく変わってまいります。一葉の小説が掲載されていた雑誌は、しかしながら『文学界』或いは『太陽』或いは『国民之友』といった、どちらかというと男性読者を中心にした雑誌が中心です。で、いずれにしろ、この明治２０年代には批評家として力を振るっているのは男性のみですので、当然その男性批評家にどのように評価されたかということが大きいわけですが、彼女の作品の第１次ですね、恐らく第２次、第３次と読者層は変わっていくと思いますが、少なくとも同時代の読者は殆ど男性の方が多かったと思います。それで、それらのことと係わりまして、博文館についてですけれども、特にこの雑誌の巻頭に写真を載せるということはこの博文館が中心になって始めたことであります。で、特にこの明治２８年には『文芸倶楽部』の他にも『太陽』、そういうような大きな雑誌を幾つも博文館は刊行し、かつすべてにおいて巻頭には所謂、写真の口絵ページを載せております。で、恐らくそこには大橋音羽という非常に優秀な編集者が係わっていたかと思われますが、写真というものをですね、巻頭において読者の興味を引く形を始めたのも博文館であったと言えます。始めは風景の写真や、地方の珍しいお祭りの写真など景観を示した写真などから始め、それから実はこの『文芸倶楽部』ではこの閨秀小説号の前には全国美人図、全国の例えば金沢ですとか福岡ですか、それぞれの有名な場所の美人で有名な芸者さんたち、全員水商売の女性ですが、芸者さんたちのその写真を、今月号は金沢、来月号はどこどこという形で載せております。で、その一連の流れの上にこのＣの写真があり、そしてその同時に増刊号として出された女性作家の特集号にはこのＡ、Ｂの写真があるということになります。それから、ご参考までに、当時の写真掲載は一方では非常に尊い人々、すなわち皇室の人々から伯爵とかですね、そういう所謂高貴な人たちの写真というのが一方では掲載されます。そのイメージの所有というようなそういうことと係わっているかと思いますし、またその明治天皇のご真影といって実は真影じゃないですが、あれがいかに全国に流布していたかということはそれらと係わっていることかと思います。

問：山口

今の写真のことでちょっとお聞きしたいんですが、この鳥を配したこの構図には、何か嘴が長い類と、他に色々と考えられるんじゃないかと思うんですが、これについてどのように解釈がなされているのでしょうか。

答：菅

むしろ、ご見解をお聞かせ願えれば、大変ありがたい。私は今の段階ではその構図について、それ以上は考えておりません。バックに恐らく風景写真とか鳥写真があって、彼女たちの肖像写真を配置している構図自体もこのCが最初です。『文芸倶楽部』にそれまではバックに、その他の風景写真を持ってきて上に重ねるということは、他の全国美人図においては行っていなかったようです。よろしければ、その他の読み解き方を教えていただければ。

答：山口

専門ではないのでいい加減なことをいうと思いますが、１つは鳥というのは籠の鳥が野に放たれたというようなイメージがあるのかなあと、それから、鳥というのは近世においては取ってはいけない、鷹場がかなり設定されております特に江戸近郊では。農耕で田畑を荒らすものとして、鳥がイメージされていたところに外国人が入ってきて鳥撃ちをする、捕獲する、そういった視線があったかもしれない。これが私が考えたことなんです。

答：菅

はい、ありがとうございます。是非参考にさせていただきたいと思います。

意見：中島佐和子（お茶の水女子大学・院）

人間文化の中島と申します。花鳥ということで花に喩えたのではないかと、美人女性を花と喩えて鳥と配置したんではないか。

司会者のまとめ

平野　由紀子

３人の発表者の専攻は、それぞれ日本古典文学、日本近世史、日本近代文学であって、対象も方法も異なる。

胡潔氏は平安時代の婚姻の実態を、古代中国の婚姻と比較することにより、その特徴を明らかにした。とくに多妻婚における女性たちの関係について、従来の研究の誤謬をただすことになったドクター論文「平安貴族の婚姻と源氏物語」の一部を発表した。女性たちが夫の生家で同居し、上下の厳しい身分差のもとに序列化されるのは、古代中国や日本の後代の婚姻においてであり、それとは明らかに平安時代の婚姻は異なっていた。

古代中国から古代日本に導入された娶嫁婚的な婚姻表現－〈聘〉〈妻〉〈妾〉〈前妻〉〈後妻〉などの言葉の意味の変容を実証的に示し、古代日本には中国風の妻妾制度は存在しなかったことを論証する。これは当時の平安貴族の婚姻住居規制と密接な関係があり、古代中国に見られる〈夫方住居婚〉はないと